

〔資料〕

『准西国稲毛三十三所 じゅんれいうた』 翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

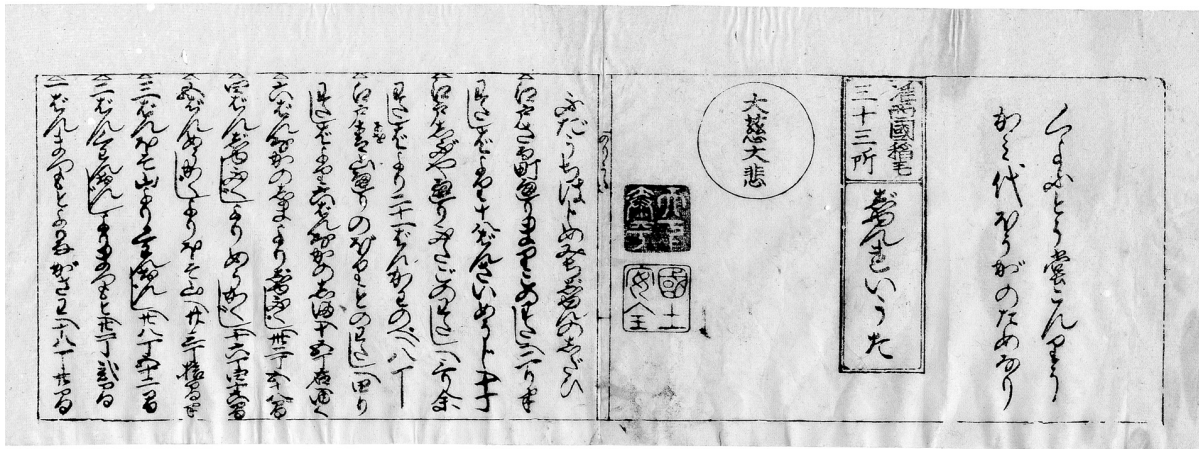
准西国稲毛三十三所観音霊場は武蔵国橘樹郡内に宝暦十四年（一七六四）四月、同郡稲毛領平村の山田平七道本の発願によって開かれたもので、道本が宝暦十四年中夏に開版した『准西国稲毛三十三所じゅんれいうた』に載る札所寺院三十三ヶ寺は、現在の神奈川県川崎市高津区（十一寺）・宮前区（八寺）・多摩区（九寺）・中原区（二寺）・麻生区（二寺）・横浜市都筑区（二寺）・稲城市矢野口（一寺）とそれほど広くない地域に所在し、宗派も天台宗（十三）・真言宗（八）・曹洞宗（五）・臨済宗（四）・浄土宗（二）・日蓮宗（二）とさまざまで、札所本尊も聖観音（十五）・正観音（五）・十一面観音（七）・千手観音（三）・準提観音（二）・如意輪観音（二）と多様であるが、今も十二年ごと午歳の総開帳は各寺が挙って執行している。

道本はまた宝暦十四年中夏に『准西国稲毛三十三所総縁起』を開版している。本書は「法の詠めまつ世の玉章」（四十四丁）、「浮世の詠めまつ世の玉章」（二十二丁）、「栄花の詠めまつ世の玉章」（六丁）の三章から成り、准西国稲毛三十三所観音霊場発願の趣旨・各寺の略縁起・観音の功德・三十三余首の自作の御詠歌などを縷々記している。それによれば道本は平村貉澤の人で、通称は平七、貉澤軒と号した。痰咳を患い十余年におよぶ苦しみから逃れ、「たとゑせなかにゆきしもぢきにふり、はしのしたにやどるみとなるとも一たび無病になし給へ」と観音に念願し、宝暦四年（一七五四）八月十四日夜から観音称名を始めたところ、一年足らずで無病の身となった。その報謝のため、母親を誘い西国三十三所巡礼をしたが、それは平村の熊野権現に、無事に帰国できたら三十三体の観音菩薩像を身命財を擲って建立す

るといふ誓願立ての旅立ちだった。しかし無事に帰郷したものの誓約は容易に果たせぬままだった。そんな折、かつて宝暦五年四月十九日夜の夢に、富士浅間から歌の題を授けられた吉夢を見たことを思い出し、欲心を捨て至心に富士を信仰したところ、神仏を建立するより近在の寺院を巡礼したほうが利益もあつかるうと思ひ至り、三十余首の御詠歌を作り、納経の札を打つこと数度に及び、ついに宝暦十三年（一七六三）十二月には百日巡拝を行い、熊野権現に祈請して西国観音霊場をこの稲毛の地に写し、「准さいこく三十三」の札所を定めたのであるという。

ここに翻刻紹介する『准西国稲毛三十三所じゅんれいうた』は『准西国稲毛三十三所総縁起』に載る三十三ヶ寺への道のりと御詠歌を記したもので、『総縁起』が漢字仮名交じりの表記であるのに対し、『じゅんれいうた』は全文はぼすべて平仮名表記で開版されていて、これが札所案内の手引書として作成されたものであることをよく示している。なお、『じゅんれいうた』は三十二番札所を聚海山西蔵寺（川崎市高津区）とするが、『総縁起』は道本が私宅地に開いた芥志山供養塔薬王庵（川崎市宮前区）としている。

底本に用いた宮島コレクション蔵『准西国稲毛三十三所じゅんれいうた』は仮綴本で、縦一四〇mm・横二〇二mm。汚れを洗い紙魚を繕い裏打を施した状態の画像を掲載した。翻刻に当っては底本の字体表記を尊重した。翻刻文作成に助力下さった泉夏歩さん（歴史文化学科二年生）、平七の事績を讚し札所を案内せられた宮島鏡氏、平七の子孫で「元名主」の屋号と薬王庵を護持され、平七について示教下さった故・山田桂氏、結願寺院泰山東泉寺の上形卓道御住職夫妻には一方ならぬご親切を賜った。御礼申し上げます。



くよふとう堂こんりう
かみ代ほうがのためなり

准西國稻毛
三十三所
じゆんれいうた

大慈大悲

天下
泰平

國土
安全

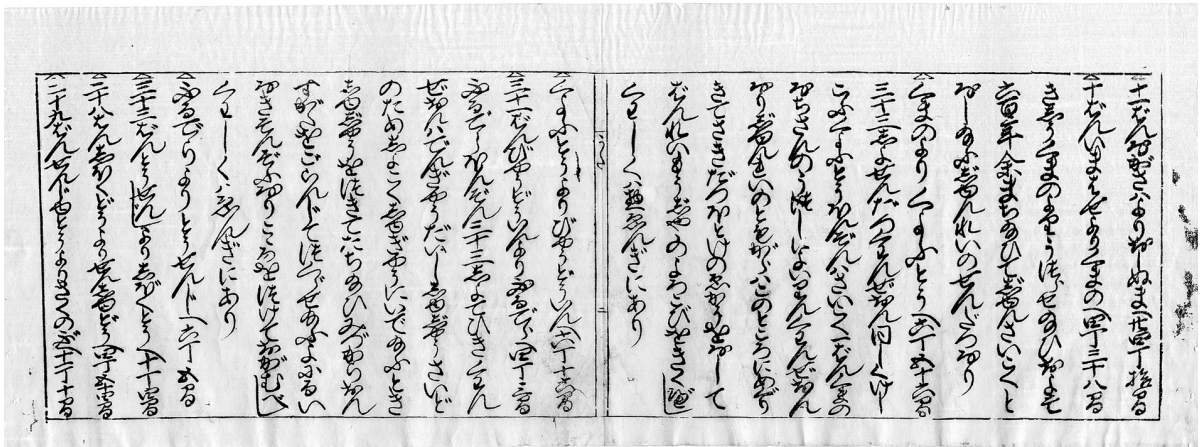
【のりうた】

【】

- ふだうちはじめみちじゆんのしだひ
- △江戸さる町辺りまりこのわたしへ二り半
わたしばより十八ばんさいめうじへ十丁
- △江戸しぶや辺りふたごのわたしへ三り余
わたしばより二十一ばんかわのべへ八丁
- △江戸青山^{あおやま}辺りのぼりとのわたしへ四り
わたしばより六ばんなかのしまへ十五丁右へゆく
- △六ばんなかのしまよりじゆふくじへ卅二丁五十八間
- △四ばんじゆふくじよりめうかくじへ十六丁四十六間
- △五ばんめうかくじよりほそ山へ廿三丁拾間半
- △三ばんほそ山よりくわんおんじへ廿八丁五十二間
- △二ばんくわんおんじよりまつもとへ廿一丁二間
- △一ばんまつもとよりながさわへ十八丁廿間

「01才・表表紙

「01ウ・表表紙見返



△十一ばんながさはよりおしぬまへ廿四丁拾間

△十ばんいまはせよりくまのへ四丁三十八間

きしうくまのよりうつらせ給ひおよそ
六百年余まち給ひてじゆんさいこくと
なし給ふじゆんれいのせんだつなり

△くまのよりくよふとうへ六丁五十六間

三十三しよせんだつくわんぜおん同しくけし
こふくよふとうほんぞんはさいこく一ばんくまの
なちさんのうつしによりんくわんぜおん
なりじゆんれいのともがらはこのところにめぐり
きてさきだつほとけのゑかうをなして
ばんれいもうじやのよろこびをきくべし
くわしくは惣ゑんぎにあり

【うた

一】

△くよふとうよりびやうどういんへ六丁十六間

△三十一ばんびやどういんよりふるでらへ四丁三間

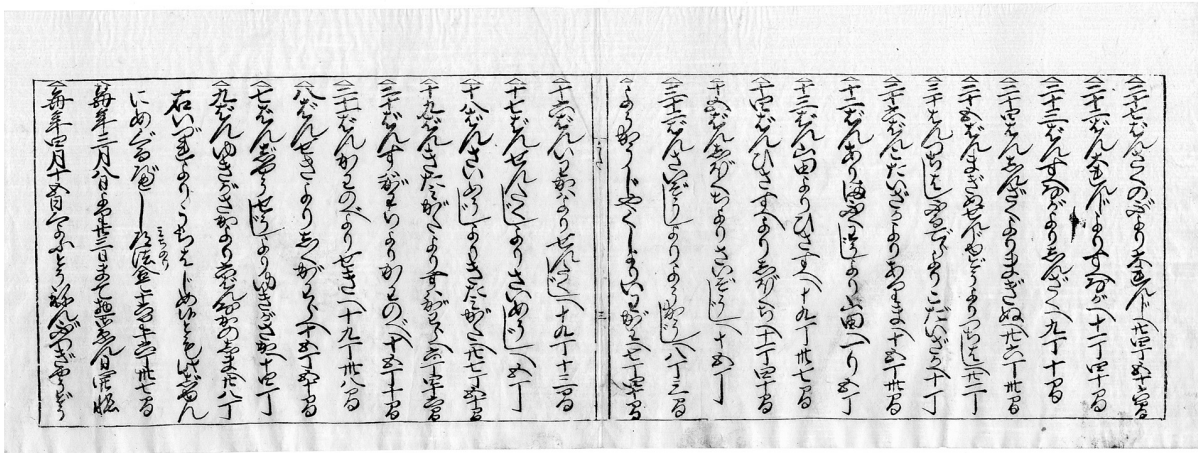
ふるでらほんぞん三十三しよてひきくわん
ぜおんはでんぎやうだいししじゆじやうさいど
のためしよこくしゆぎやうにいで給ふとき
しゆじやうをつきてたち給ひみづからおん
すがたをごらんじてつくらせ給ふよにるい
なきそんぞふなりこゝろをつけておがむべし
くわしくはゑんぎにあり

△ふるでらよりとうせんじへ六丁五間

△三十三ばんとうせんじよりしぼくとうへ十丁四間

△二十八はんしほくどうよりせんしゆどうへ四丁五十四間

△二十九ばんせんじゆとうよりさくのぶへ十一丁十間



- △二十七ばんさくのぶより大れんじへ廿四丁五十六間
- △二十二ばん大れんじよりすへながへ十一丁四十間
- △二十三ばんすへながよりしんざくへ九丁十間
- △二十四ばんしんざくよりまぎぬへ廿六丁卅間
- △二十五ばんまぎぬせんじゆどうよりつちはしへ廿二丁
- △三十はんつちはしふるでらよりこだいざかへ十丁
- △二十六ばんこたいざかよりありまへ十五丁卅間
- △十二ばんありまふくわうじより山田へ一り五丁
- △十三ばん山田よりひさすへへ十九丁卅七間
- △十四ばんひさすへよりしぼくちへ十一丁四十間
- △十五ばんしぼくちよりさいぞうじへ十五丁
- △三十二ばんさいぞうじよりかうじへ八丁三間
- △ようかうじやくしよりいわがわへ七丁四十間

【うた

三】

- △十六ばんいわかはよりせんたくじへ十九丁十三間
- △十七ばんせんたくじよりさいめうじへ五丁
- △十八ばんさいめうじよりきたみがたへ廿七丁五十間
- △十九ばんきたみがたよりすはがわらへ六丁四十六間
- △二十ばんすはがわらよりかわのべへ十五丁十間
- △二十一ばんかわのべよりせきへ十九丁卅八間
- △八ばんせきよりしくがわらへ十五丁五十間
- △七ばんじやうせうじよりゆきがさかへ十四丁
- △九ばんゆきがさかより六ばんなかのしまへ廿八丁
- 右いづれよりうちはじめ候とも此じゆん
- にめぐるべし道法合みちのりて十六里十六丁卅七間
- △毎年三月八日より廿三日まで惣御参り日開帳
- △毎年四月十五日くよふとうねんぶつきやうどう

「 03 オ

「 03 ウ

一ばんにまつもと
 たのめなをひろきふくじゆのうみなれば
 だいひのなみのたゝぬひもなし
 二ばんにくわんおんじ
 もらさじとみちびきたまへくわんおんじ
 するもしらぬもみてのはちすに
 三ばんほそやま
 たつねいるこゝろほそやまみちのべの
 くさばにやどるつゆのみなれば
 四ばんにじゆふくじ
 ふだらくのみめうののりはじゆふくじに
 いつもたゑせぬまつかせのおと
 【うた】
 四
 五ばんにめうかくじ
 たづねくるこゝろはすぐにめうかくじ
 ほかにほとけのみちはあらじな
 六ばんになかのしま
 ほつしやうのみやこにかぶなかのしま
 やつのくどくのいけのみぎわに
 七ばんにじやうせうじ
 くもりなきしんによのつきはじやうせうじ
 なをもはれよとおのかこゝろを
 八ばんりうごんじ
 じひふかくのりのしからみせきとめて
 はつせのみづのよどまぬもなし

九ばんにゆきがさか
 いつしかとかしらにつもるゆきがさか
 たれかのがれんおひのとふげは
 十ばんにいまはせ
 まつかぜやしかのなくねもみにぞしる
 いまはせでらのあきのゆぶぐれ
 十一ばんにしうげついでん
 たくさんにねがひもみつるあきのつき
 あまねきかどにじひのかげかな
 十二ばんにふくおふし
 めぐりきてこゝにありまのふくわうじ
 むりやうじゆゑひのちかひたのもし
 【うた 五】
 十三ばんやまたのくわんおんじ
 きみがためやまたのさわになをながす
 じひのころもはいまだかわかず
 十四ばんにひさすゑ
 みてをのべすくふ大ひはひさすへの
 よろずよまでもたのもしきかな
 十五ばんにしほくち
 さしもぐさしめじがはらのみなしこや
 ひほのこくわんをうるそうれしき
 十六ばんにいわがわ
 いわがわやこけむすみづにみをこらし
 こゝろをきよくくみてしるべし

九ばんにゆきがさか

いつしかとかしらにつもるゆきがさか

たれかのがれんおひのとふげは

十ばんにいまはせ

まつかぜやしかのなくねもみにぞしる

いまはせでらのあきのゆぶぐれ

十一ばんにしうげついでん

たくさんにねがひもみつるあきのつき

あまねきかどにじひのかげかな

十二ばんにふくおふし

めぐりきてこゝにありまのふくわうじ

むりやうじゆゑひのちかひたのもし

【うた 五】

十三ばんやまたのくわんおんじ

きみがためやまたのさわになをながす

じひのころもはいまだかわかず

十四ばんにひさすゑ

みてをのべすくふ大ひはひさすへの

よろずよまでもたのもしきかな

十五ばんにしほくち

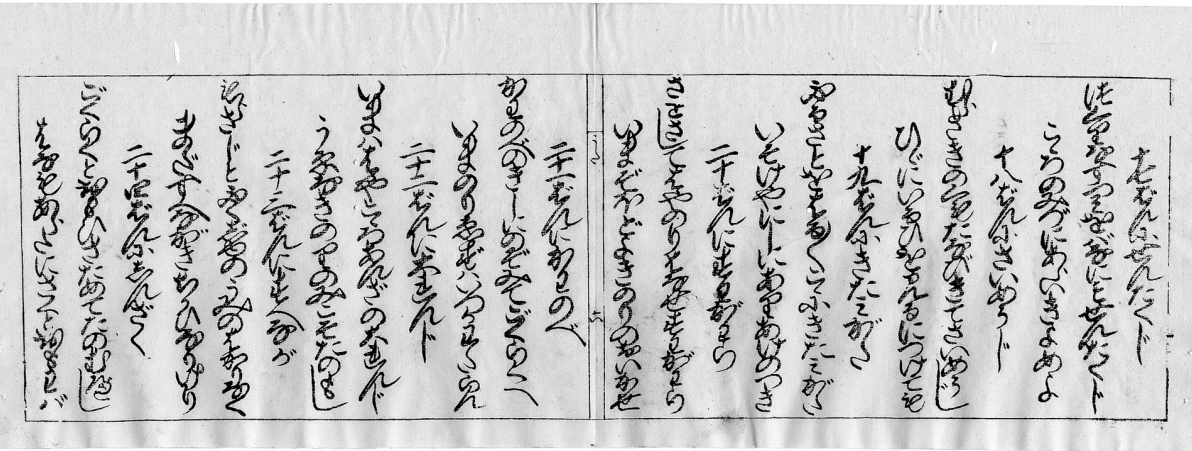
さしもぐさしめじがはらのみなしこや

ひほのこくわんをうるそうれしき

十六ばんにいわがわ

いわがわやこけむすみづにみをこらし

こゝろをきよくくみてしるべし



十七ばんにせんたくじ

つくりなすつみをばなにをせんたくじ

こゝろのみづにあらいきよめよ

十八ばんにさいめうじ

むらさきのくもたなびきてさいめうじ

ひゞにひを見るにつけても

十九ばんにきたみがた

ふるさとをはるくこゝにきたみがた

いそげやにしにありあけのつき

二十ばんにすわがわら

さをさしてはやのりはなせすわがわら

いまぞほどよきのりのおいかせ

【うた 六】

二十一ばんにかわのべ

かわのべのきしにのぞみてごくらくへ

いまのりゑずはいつかわたらん

二十二ばんに大れんじ

いまははやこゝろあんざの大れんじ

うゑなきのりのみこそたのもし

二十三ばんにすへなが

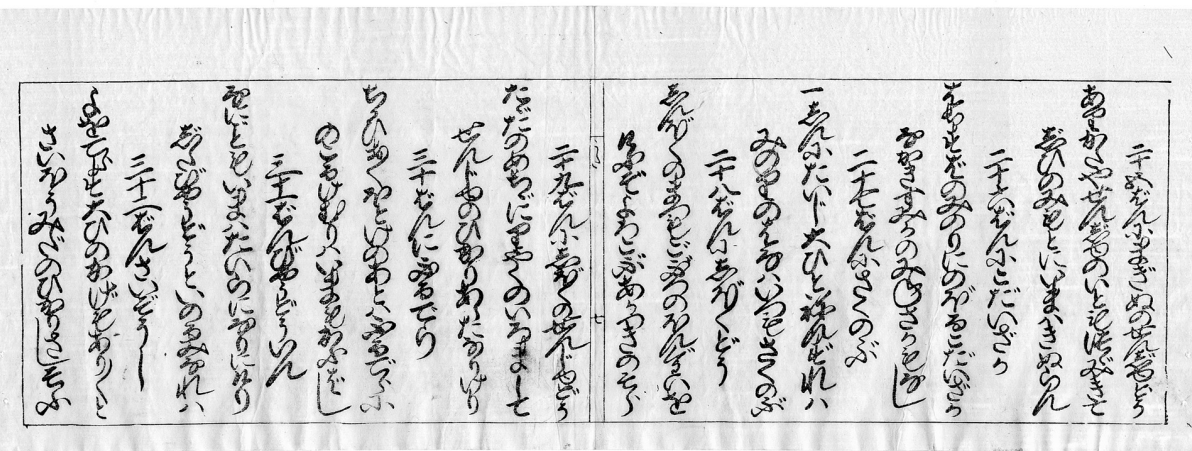
もらさじとふくじゆのうみのはかりなく

まだすへながきちかひなりけり

二十四ばんにしんざく

ごくらくとおもひさためてたのむべし

はなもあらたにさくとおもわば



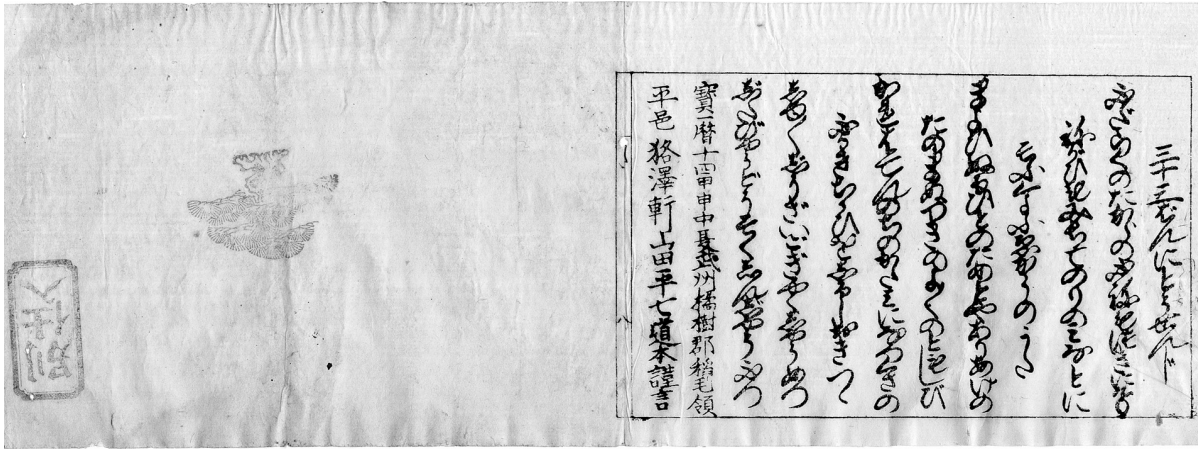
二十五ばんにまぎぬのせんじゆどう
 ありかたやせんじゆのいともつゞみきて
 じひのみもとにいまはきぬらん
 二十六ばんにこだいざか
 はちすばのみのりにのぼるこだいざか
 なかきすみかのみねさかもなし
 二十七ばんにさくのぶ
 一しんにたいじ大ひとねんずれは
 みのりのはなはいつもさくのぶ
 二十八ばんにしぼくどう
 しんぼくのまつもごぶつのほんぐわいを
 けふぞよろこぶあかつきのそら

【うた 七】

二十九ばんにしぼくのせんじゆどう
 たゞたのめちゞにりやくのいろまして
 せんじゆのひかりあらたなりけり
 三十ばんにふるでら
 ちかひおくほとけのあとにふるでらに
 のこるけむりはいまもかふばし
 三十一ばんびやうどういん
 なにごともいまはたいらになりけり
 じたびやうどうといのるみなれは
 三十二ばんさいぞうし
 よをてらす大ひのかけもあり〜と
 さいほうみだのひかりさしそふ

「07オ

「07ウ



三十三ばんにとうせんじ
 ふだらくのたからのふねもつきにけり
 ねがひもみちてのりのみなどに
 そふくよふゑかうのうた
 まよひぬるひとのためとやありあけの
 たのまぬつきのよゝのともしび
 かれはてんのちのかたみになつくさの
 ふかきちかひをしるしおきつゝ
 しゆくじうざいごぎやくしやうめつ
 じたびやうどうそくしんじやうふつ
 寶曆十四甲申中夏武州橘樹郡稻毛領
 平邑 貉澤軒山田平七道本謹言

三十三ばんにとうせんじ

ふだらくのたからのふねもつきにけり

ねがひもみちてのりのみなどに

そふくよふゑかうのうた

まよひぬるひとのためとやありあけの

たのまぬつきのよゝのともしび

かれはてんのちのかたみになつくさの

ふかきちかひをしるしおきつゝ

しゆくじうざいごぎやくしやうめつ

じたびやうどうそくしんじやうふつ

寶曆十四甲申中夏武州橘樹郡稻毛領

平邑 貉澤軒山田平七道本謹言

【うた

八】

「08才・裏表紙見返

絵(松)



「08ウ・裏表紙

(せきぐち しずお 歴史文化学科)